

終刊に寄せて

会長 森 英一

この『金沢大学語学・文学研究』は今号をもって終刊となり、ほぼ年一回刊行し続けての三八年に及ぶ歴史にピリオドを打つことになる。その大きな理由の一つに大学自体の大幅な組織の変更がある。それなりに貢献してきたので残念なことだが、時代の趨勢には逆らえない。

本誌は発行母体こそ金沢大学教育学部国語国文学会で一貫して変わらないが、学会の組織は一度大きく衣替えをしている。つまり、こういうことである。発足時、〈教育学部国語研究室の関係者を中心に、会の目的に賛同する者を会員〉(旧会則第四条)とし、事務局も国語研究室内に置いた。研究者の集まりが周辺に刺激を及ぼし、新たに仲間が増えていくことを意図していた。

しかし、卒業生の中でごく一部の者が入会するに過ぎず、総会員数もさほど多いとは言えなかったし、実態は同人誌的な性

格を有していた。学会の発足と同時の一九七〇年三月発行の本誌創刊号に、「彙報」欄として開講講義題目や卒業論文題目、人事情報等が掲載されたが、第二号以降は殆ど途絶えてしまったのも、その証左の一つであろう。

「彙報」欄が復活したのは一九九〇年三月発行の第二〇号からである。学会構成員の裾野を拡大したいという総意に基づく。当時の深井一郎会長が第一九号に掲載した「一提言」という一文がその辺の事情に詳しい。また、第二〇号からは「広場」というエッセイを掲載する欄が新設され、卒業論文要旨も新たに掲載されるようになった。

これらは、〈研究〉と縁遠い新会員にも気軽に読んでいただく意図があったからだ。というのも、卒業後は必ずしも研究に携わるわけではなく、むしろそちらが極少数である状況を考慮し、学会を同人誌的なものから同窓会的なものに路線変更する以

上、「二提言」にもあるように、それなりの編集が必要だからである。さらに、後に区別はなくなるが、健全財政の見地から一般会員と維持会員の二種類に会員を分けることも実施された。

全号を今日の前に並べてみると、その長い歴史がしっかりと刻み込まれているのに改めて気づかされる。途中から民間の印刷会社に変わったが、しばらくは紫錦台印刷所つまり金沢刑務所で印刷していた。打ち合わせのため城内のキャンパスから刑務所の門を何度も潜った。書店や出版社の広告をいただいたことも何号があった。

無事定年を迎えられた深井先生と園家榮照先生と深川明子先生、記念特輯号も合わせて二度編まれた。執筆された方で、その後消息が不明な方も結構いる。長い年月だから物故者も見受けられる。

本誌の終刊同様、学会の活動も様変わりする。会費を徴収しての活動は行わないことになった。時々の集会を企画し、集って頂くことになる。しかし、何時の日にか機運乗じて新たな組織が結成され、装いを一新した機関誌が再生されるかも知れない。

ともあれ、金沢大学教育学部と共に歩んだ本誌の歴史が閉じられたことは確かである。